

---

# 漆黒の裁き

神夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

漆黒の裁き

### 【Nコード】

N0175Z

### 【作者名】

神夜

### 【あらすじ】

魔法が無い世界は、超能力開発に成功した。だが、超能力を犯罪に使う者が表れる。

主人公は、悪を裁く悪になる。

1話(前書き)

初投稿です

見て下さい

## 1話

空が黒く染まり、一つ一つ小さな煌めく星の下。  
とあるビルの社長室の床に、水溜まりが出来ている。

そして、社長室の中に、一人の青年が居る。

何故青年が居るかはわからない、でも

その青年の視線の先には、身体中に銃弾を受けて死んで居る、このビルの社長の姿がある。

青年は、ドアの方に振り返り歩き出し青年は、ケータイを取り出し電話した。

青年「任務完了だ……………」

????『了解した』

短い会話が終わり、青年はビルを後にして家の近くの公園のベンチに座り、胸ポケから、「マルポロ」(タバコの種類)を取り出しタバコを口に加え火をつけた。

青年「ふうー うまいな」

煙を吐きながら空を眺めて、手を空に目掛けて掲げた。

青年「帰るか」

青年はタバコを捨て歩き出し、公園を後にした。

2話(前書き)

見てください

## 2話

朝、青年は高校の制服を身に纏い、テーブルの上に置いてある、

デザートイーグルを二丁持って腰につけたホルスターに入れた。

青年は、リュックを持って玄関に向かった

青年「行ってきます」

返事が聞こえない家を出て通学路を歩いて居ると、

????「Good morning」

青年「なんだ、勇希か」

勇希「なんだとはなんだ!!」

青年「別に」

下らない話をしながら歩いて居ると、学校に着いた。

下駄箱に靴を入れて上履きを取り出し、上履きを履いて教室に向か  
って歩き出した。

今は、10月入学してから6ヶ月もたったのに、青年は誰とも話を  
しないで机に伏せて寝ていた。

青年「よく寝たな」

青年が起きた時にはもう、放課後になっていた。

青年は教室を出て下駄箱で靴に履き替えて歩き出した。

校庭の真ん中辺りで空を見上げたら、ズボンのポケットに入っているケータイがなった。

青年「はい……………」

「……………」仕事内容、赤波グループの赤波春樹が、超能力で薬物を透明化して密輸している。」

青年「能力は」

「……………」触れた物を一時的に透明化する事が出来る力だ」

青年「了解」……………」頼んだ」

電話を切ると、走り出した。走り出して5分経つと家についた。青年は家に入り、自分の部屋のクローゼットを開けて、中にある、真っ黒いロングコートを取り出した。

ブレザーを脱ぎ捨て、ロングコートを着た時、  
チイリーン チイリーン  
と、鈴の音が聞こえた。

青年の腰に鈴が三つついている。

青年は夜になるのを部屋の中でまった  
趣味のエレキギターをひきながら。



8時になったと同時にギターを止めて、手袋をして家を出た。

10月の8時は結構暗くそして、冷えるこの時期

青年は目的地まで歩き、目的地の会社が見えてきた。

青年は会社の一階の窓を音がしないように破壊した。会社に侵入して向かった所は、「社長室」に向かい、社長室に静に侵入した。

社長「赤波春樹」は隣の部屋でテレビを見ていたため、バレずに侵入できた。

社長「赤波春樹」が椅子から立ち上がった。青年はベランダに行き、身を潜めていた。

赤波春樹「さて、仕事も終わったから帰って寝よう」

パソコンをバッグに入れて帰ろうとした時、

青年は、社長「赤波春樹」の後ろにつき、社長「赤波春樹」の口を左手で塞ぎ、喉元を右手で持っていたナイフで斬り裂いた。

社長「赤波春樹」は即死

床に敷いてある、グレーのカーペットは血がつき、赤黒く変色していた。

青年は、死体を眺めながら呟いた

青年「自分が犯した罪を……死んで償え……」

青年は何事も無かった様に会社を後にし家に帰った。

### 3話

家に帰り、ソファアに座り銃とナイフを取り出してテーブルの上に置いた。

青年は、ケータイを取り出し電話した

青年「任務完了」

??? 『了解、報酬は振り込んだ』

短い会話をして電話を切ってテーブルに置いた。

青年は、ソファアの隣にある引き出しの中から、睡眠薬を取り出して、薬を二粒出して飲んだ。

少しして、青年の意識は闇の中に消えた。

日が昇り、朝になった。

青年は、ソファアから立ち上がり、洗面所に歩き、顔を洗った。

青年は部屋に行き、制服に着替えて、テーブルの上の、デザートイーグル二丁を腰に付いているホルスターに入れた。

青年「弾が少ないな……」

テーブルの下にある箱をテーブルの上置き、箱を開け、中から50AE弾が入っている、マガジン弾倉を取り出して、制服の胸ポケットに入れた。

青年は、ソファから立ち上がり、リュックを背負って玄関に行き家を出た。

少し歩いて町の景色を見ると、学校についた、そして、いつもの様に自分の席で寝た。

学校が終わり、青年は先生に叩き起こされ、家に帰る準備をしていると、

ズボンにいれた携帯が鳴りだし電話に出た。

青年「はい」

??? 『お前の家に何者かが、侵入した。 以上だ』

相手は、要件だけ伝えて電話を切った。

青年（侵入者か……）

青年は携帯をズボンにしまい、学校を後にした。

空は少し黒く、風は肌寒く、もう季節の変わり目を感じながら歩いていると、家についてしまった。

青年「ただいま」

返事がしない家に入り、ソファに座った。

そして、青年は誰かに話す様に独り事をいった。

青年「目的は、俺だな……出てこいよ……俺はここに居るぜ」

呟くと、頭に銃の先端を突き付けられた。

「貴方が、黒神 紅夜であつてる?。」

声からして、女性。

紅夜「あつてるぜ」

「私は、貴方を殺したいけど、父が密売してたから、悪いのは父だから貴方を殺さない」

紅夜「殺したいなら、殺せばいい、俺が死んだら俺はそこまでの人間だった。ただそれだけの事だ」

「……どうして」

紅夜「なにが」

女性は、泣きながら青年の前に来て、胸ぐらを掴んで、叫んだ。

「どうして命を粗末に扱えるの!? 貴方が死んだら悲しむ人が居るんだよ!」

無表情のまま、泣いてる女性を見て、言い放った。

紅夜「俺には悲しむ奴なんて存在しないから、だから俺は、暗殺者をしてるんだぜ……」

女性は驚き、尋ねた

「????」「家族は？」

紅夜「居ない、俺が3歳の時に死んだ」

女性は胸ぐらを掴んでた手を話し、青年を見ながら喋った。

「????」「だから、死んでもいいの？まだ楽しい事だつてあるよ？」

紅夜「死等いつも覚悟してる。仇や復讐、俺を殺す理由なら沢山ある」

「????」「そう……………」

女性は、泣きながら歩き出し、家を出た。  
家の前に車が有るとは知らずに

女性が帰って5、6分経った時、テーブルの上に置いた携帯が鳴った

紅夜「はい」

「????」「大変だ！！歌奈が、拐われた！！」

紅夜「歌奈って誰だ、勇希」

勇希「（紅夜は憶えてねえんだっただ！！）いや気にするな。仕事内容、拐われた女性を助ける事。」

紅夜「何処に居る」

勇希「山にある廃校だ、敵の数は……………約20人だ」

紅夜「了解」

電話を切り、二階の部屋に行き黒いワイシャツに着替え、その上から黒いロングコートを纏った。

部屋の中にある、大きな箱を開け中から、スモークグレネードを2個スタングレネードを1個

・50AE弾が入った<sup>マガジン</sup>弾倉を6個取り出した。

弾倉は、<sup>マガジン</sup>コートの内ポケットに順番に入れグレネードは、腰にぶら下げた。

紅夜「行くか……………」

紅夜は、家を出て、目的地である廃校を目指して歩き出した。

歩いて、10分程したら、廃校についた。

紅夜「ここが、廃校」

廃校の入り口に入り、足音をたてずに、歩き出した。

後ろの方から、誰かが向かって来て居るのに気が付いて、廃校の一つの元教室に身を潜めた。

男A「あの女、可愛いよな」

男B「俺等で遊ぶか？」

男A「良いねえーそれ」

下品な会話をしている二人が教室の前を過ぎた時、紅夜は、袖口に隠してたナイフを二つ取り出して男共目掛けて投げた。

ナイフは真っ直ぐ飛び、首に突き刺さって、男共が倒れ地面に赤い水溜まりができた。

紅夜「人質は、返して貰う」

## 4話

男C「侵入者です!!」

隊長「可哀想になこんな女の為に死にに來たとは」  
歌奈「……………」

ロープでぐるぐる巻きにされて口にガムテープが貼られて何も喋れない歌奈の姿がある。

隊長「全員、侵入者を殺せ!!」

全員「ハッ!!!!!!!!!!」

隊長（誰だろうな侵入者って、見てみたいな）

side out

紅夜side

二つの小さな赤い水溜まりが一つに合わさった  
月の光が窓から降り注ぎ、暗くてよく見えない水溜まりは、キラリと赤く輝きだした。

紅夜は、二つの死体を無視して歩きだしていると、前から、誰が走ってる音がした。

バレたか……  
紅夜



紅夜は人差し指と中指でナイフを挟み、構えた廊下の奥から足音が近付いて来ている。

廊下の奥で一瞬輝やいた、紅夜は輝やいた場所目掛けてナイフを投げた。

男D「グワツアアアアア」 バタツ

紅夜（三人目）

廊下の奥に向かって歩いてみると、電気がついている教室を見付けた中を覗くと、椅子に座ってロープでぐるぐるにされて居る歌奈の姿と、

髭をはやした中年のおっさんがいた。

紅夜は、デザートイーグルを一挺右手で取り出して、静かにおっさんに銃口を向けて。

Bannon

一発の銃弾が、おっさん目掛けて、一直線に向かっていった。

弾丸がおっさんの頭を貫いたと思った時、

おっさん「効かんよ」

おっさんは体を少しずらし、弾丸を回避した

おっさん「出て来たらどうだい？紅夜クンよ？」

紅夜「お前は、何者だ!？」

おっさん「唯の高校生が乗り込んで来るとは……この女を返して欲しいなら私を殺せ……君見たいな高校生に出来るかな？」

おっさんは知らない、紅夜が暗殺者だと言っ事を。

紅夜「死ね」

腰からデザートイーグルを取り出し

バアン

廃校全体に乾いた音が響く、おっさんの頭には一発の弾丸が撃ち込まれた。おっさんは前に倒れ込み、頭から血を流しながら死んで逝った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0175z/>

---

漆黒の裁き

2012年1月4日11時51分発行